

乳幼児の顔表情からの感情の読み取りを規定する母親の個人特性に関する探索的検討

著者	松田 久美
雑誌名	北翔大学北方圏学術情報センター年報
巻	8
ページ	39-52
発行年	2016
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002455/

研究論文

乳幼児の顔表情からの感情の読み取りを規定する 母親の個人特性に関する探索的検討

松田 久美

北翔大学短期大学部こども学科

抄 録

本研究の目的は、顔表情からの感情の読み取り方の個人差（以下、「感情読み取り特性」と呼ぶ）と母親自身が持つ様々な個人特性との間、また個人特性間にある関係性の検討を通して、母親の感情読み取り特性が母親の個人特性によって規定される機序を解明することである。そのために、1歳半前後の乳幼児の顔写真呈示実験及び質問紙調査を行った。分析対象は、4～32ヶ月の乳幼児を持つ母親114名であった。

まず、相関分析の結果、「明瞭な快表情」からの快感情の読み取り、及び「明瞭な不快表情」からの不快感情の読み取りと、本研究で設定した6種の母親の個人特性との間には、関連が全く示されなかった。一方、「曖昧な顔表情」から特定の感情を読み取る傾向と、6種の母親の個人特性との間には多様な関連性が示された。また、個人特性間では、「情動共感性」と「傷つきやすさ」、「情動共感性」と「自己統制機能」以外の組み合わせにおいて関連が示された。

さらに、相関分析の結果に基づき感情読み取り特性への効果を仮定した8種のモデルを用いてパス解析を行った。その結果、「明瞭な顔表情」及び「曖昧な顔表情」からの感情読み取りに、直接的に影響を与える母親の個人特性、またその背後で間接的に影響をもたらす個人特性が構造的に示された。

キーワード：感情の読み取り、個人特性、明瞭な顔表情、曖昧な顔表情

I. 問題と目的

泣き、微笑といった子どもの顔表情は、大人に向けて発せられるシグナルとして機能し、大人から養育行動を引き出すとされている（例えば、Emde and Sorce, 1982⁶⁾; Strathearn, Fonagy, Amico, & Montague, 2009⁵⁰⁾; 正高, 1999²⁸⁾）。それは、誰が見ても同じように解釈される「明瞭な顔表情」から感情を読み取った場合のみならず、快感情とも、不快感情とも解釈される「曖昧な顔表情」から何らかの感情を読み取った場合にも、養育行動が誘引されるという意味においては同様であると考えられる。

Starn (1979/1979)⁴⁸⁾は、子どものシグナルに、やみくもな応答を返す母親の存在を指摘している。ここにみとめられるのは、顔表情を含む子どものシグナルからの不正確な、あるいは恣意的な解釈とそれに随伴した行動

との組み合わせであると考えられる。一方、Schaffer (1977/1979)⁴⁴⁾は、子どもの状態よりも自分自身の願望や欲求に自分の行動を調整する母親を見出している。ここにあるのは、子どものシグナルを正確に読み取ったにもかかわらず、その読み取りに非随伴的な行動のとり方である。このように、子どもが発したシグナルの知覚を発端として、それをどのような感情の表れとして解釈するのか、続いてそれに随伴した行動をとるのかどうかといった一連の情報処理は、養育行動の動機づけ、方向づけのプロセスとして位置付けることができる。したがって、シグナルとしての顔表情から感情を読み取る際に生じる個人差（以下、「感情読み取り特性」と呼ぶ）がどのような要因から生じるのかを明らかにすることは、養育における情報処理過程を理解する上で重要であると考えられる。

一方、快・不快が「曖昧な顔表情」に対しては、見る人によって解釈が分かれ、その読み取りには個人差があら

われやすいことが見出されており (Butterfield, 1993⁵⁾ ; 向後・越川, 1996²⁰⁾ ; Pollak, Cicchetti, Homung, & Reed, 2000⁴³⁾ ; 小原, 2005⁴⁰⁾), 中立的もしくは多義的な「曖昧な顔表情」に対する反応の個人差 (以下, 「個別性」と呼ぶ) は, 様々なパーソナリティ特性や精神疾患, 過去の対人関係の在りよう及び日頃抱えがちな感情がもたらす「認知のバイアス」(Forgas, 2000⁸⁾ ; Izard, 1991¹³⁾ ; Magai & McFadden, 1995²⁴⁾ ; Tomkins, 1995⁵²⁾) や「認知の選択性」(Malatesta & Wilson, 1988²⁵⁾) と関わりを持つことも確認されている (Butterfield, 1993⁵⁾ ; 濱田, 1990¹¹⁾ ; 池田, 1987¹²⁾ ; 松田, 2006²⁷⁾, 2007²⁸⁾, 2008²⁹⁾, 2009a³⁰⁾, 2009b³¹⁾ ; Matsuda & Adachi, 2011²⁵⁾) ; 小原, 2005⁴⁰⁾ ; Pollak et al, 2000⁴³⁾)。

顔表情からの感情認知と個人特性との関連性を検討した研究自体は決して多くない。しかしながら, 金政 (2005)¹⁴⁾ や, 島 (2010)⁴⁶⁾, 島・福井・金政・野村・武儀山・鈴木, (2012)⁴⁷⁾ では, 大学生を対象として成人の顔表情刺激に対する情報処理機能と内的作業モデルとの関連が検討され, 「回避」と無意識的, 自動的な情報処理との関連 (島, 2010⁴⁶⁾ ; 島ほか, 2012⁴⁷⁾), 「不安」と意識的, 統制的な処理との関連 (金政, 2005¹⁴⁾) がそれぞれ示された。また, 「回避」は内的作業モデルの不活性と関連しており (Shaver & Mikulincer, 2007⁴⁵⁾), 「回避」の高い人は, ネガティブな情報への認知的アクセシビリティが低く (Baldwin & Kay, 2003¹⁾ ; Mikulincer & Orbach, 1995³⁷⁾), 「不安」は内的作業モデルを過活性化し, ネガティブな情報へのアクセシビリティを亢進する (Fraley et al., 2006⁹⁾ ; Mikulincer & Orbach, 1995³⁷⁾) とされている。さらに, 虐待リスクが高いほど, または母親の育児不安が高いほど, 乳幼児の曖昧な顔表情を「快感情」として読み取りやすいという結果が得られている (Butterfield, 1993⁵⁾ ; 小原, 2005⁴⁰⁾)。

一方, 乳幼児の顔表情を用いた松田らの研究 (松田, 2007²⁸⁾, 2008²⁹⁾, 2009a³⁰⁾, 2009b³¹⁾, 2010³²⁾ ; Matsuda & Adachi, 2011³⁵⁾) は, 誰が見ても同じ感情を読み取る「明瞭な顔表情」から一般的な読み取りをする傾向 (以下, 「一般性」と呼ぶ) にあるほど, 他者との関係を回避し, 欲望や行動を制御すること, またそれは自分を含む集団がおかれた状況に臨機応変に対応できる能力に高められることを示した。また, 快・不快が「曖昧な顔表情」からの感情の読み取りについては以下の結果が示された。まず, 「嫌悪」の感情を読み取りやすいほど, ストレスによって傷つきにくく, 自分の殻に引きこもりにくく, 他者と自分自身に対して安定した表象を抱く傾向にあること。「喜び」を読み取りやすいほど, 自分の意思や希望を表出し, 実行する傾向にある一方で, 感情的暖かさは乏しいこと。「悲しみ」や「驚き」, 「怒り」の

感情を読み取りやすいほど, 自分の欲望や行動を制御する傾向にあること。さらには, 「恐れ」として読み取るほど, 自己に対しても他者は自分に応答的であるという表象を抱き, 自分に対してはそうした対応を受ける価値ある存在としての表象を抱く傾向にあることが示された。これらの結果から, 母親の感情読み取り特性は, こうした母親自身が持つ様々な個人特性に規定される可能性が示唆された。しかし, 以上の結果は, それぞれ別々の母親を対象とした調査から得られたものであった。そのため, 複数の個人特性間の関係性について検討することはできず, また, それらから感情読み取り特性が受ける影響性を構造的に捉えることもできなかった。そこで, 本研究では, 同一サンプルの感情読み取り特性と複数の母親の個人特性との間, また個人特性間にある関係性の検討を通して, 母親の「感情読み取り特性」が規定される道筋を解明することを目的として, 実験及び質問紙調査を行った。

具体的には, まず, 誰からも特定の感情のあらわれとして一致した読み取りをされる明瞭な顔表情刺激に対する読み取りの「一般性」と, 快感情としても不快感情としても読み取られる曖昧な顔表情刺激に対する読み取りの「個別性」のそれぞれを「乳幼児の表情認知検査 (The test for Interpretations of Toddlers' Facial Expressions = TITFE)」(松田, 2006²⁷⁾, 2012³⁴⁾) を用いて測定した。TITFEは, 快感情3枚, 不快感情3枚, 驚き3枚から成る明瞭な顔表情刺激9枚と, 曖昧な顔表情刺激8枚から構成されており, ランダムに呈示される表情刺激から感情を読み取り, 「うれしい」, 「かなしいよお」, 「おこってる」, 「こわいよお」, 「びっくり」, 「いやだ」の6つから選択するというものである。

また, 本研究では取り上げた母親の個人特性は, (1)傷つきやすさ, (2)ストレス反応, (3)情動共感性, (4)内的作業モデル, (5)情動知能, (6)自己統制機能であった。感情読み取り特性とこれらの個人特性の間には, 別々のサンプルにおいて, すでに関連性が認められていることについては先に述べた。しかし, 同一の標本での検討を目指す本研究においても, 改めてそれぞれの個人特性に関する定義, 子育てとの関連性, さらに感情特性との関連が予測される根拠について以下に述べる。

「(1)傷つきやすさ (vulnerability)」とは, Lazarus and Folkman (1984/1991)²³⁾ によるストレス認知処理理論において, 「ストレッサーを自分にとって脅威かどうか」ということの判断 (第一次評価) を表す特性である。Lazarus and Folkman (1984/1991)²³⁾ は, 傷つきやすさについて, 「ストレスフルな状況に対する対処方略の変数」(p. 382), あるいは「個人内の潜在的脅威 (レディネス) を表すもの」(p. 56) と定義している。

さらに、「傷つきやすさという言葉は、心理的ストレスと人間の適応に関する概念化と研究に広く用いられている」(p. 47)とし、Garnezy (1976) や、Weisman (1976), Zubin and Spring (1977) を例に挙げ、「特に、個人の資質が適切であるか、対処能力が十分であるかについて論ずるときに用いられている」(p. 47) とも述べている。以上から、傷つきやすさとは、ストレスに対する潜在的な弱さを意味する概念として捉えられる。「(2)ストレス反応」については、研究者により様々な定義があるが、本研究におけるストレスは、Lazarus (1988/1990)²²⁾による「ある個人の資源に何か重荷を負わせるような、あるいは、それを超えるようなものとして評価された要求」(p. 22)という、環境と個人の間に起こる相互作用的な側面を重視した定義に基づくものとする。Lazarus and Folkman (1984/1991)²³⁾によれば、私たちが日常「ストレス」と呼んでいるのは、前述の第一次評価の他、以下の3つの段階に分けられる。脅威である場合に対処(コーピング)可能かどうかを判断する第二次評価、コントロールができていくという実感があるかどうかに基づいた再評価である第三次評価、そして、結果として生じるストレス反応(ストレスに対処しようとした結果、生じる感情や気分、自覚症状の変化や生理化学的变化)である。このように、ストレス反応の有り様には、個々人が自分の身のまわりに起こっている出来事をどう評価するかという主観的な側面が関わっており、Lazarus and Folkman (1984/1991)²³⁾は、「認知的評価という媒介過程によって、一連の心理的变化を生じさせる出来事から、対処行動や情動的反応、身体的変化というような出来事を導くようになる」(p. 289)と述べている。一方、ストレスと養育行動との関連性については、野澤 (1989)⁴⁰⁾など多くの研究が示している。したがって、母親が潜在的に持つ「傷つきやすさ」や、母親として、妻であり嫁として、また職業人として、日々母親が抱くストレスへの生体反応及び情動的变化としての「ストレス反応」の度合いが、子どもが発するシグナルとしての顔表情に対する感度や、感情の読み取り方に影響を与える可能性が予測される。

共感性については、Stotland (1969)⁴⁹⁾が「他者が情動状態を経験しているか、または経験しようとしていると知覚したために、観察者にも生じた情動的な反応」と定義し、Mehrabian and Epstein (1972)³⁶⁾が、Stotlandによって定義された共感性を「(3)情動共感性」とよび、これを測定するための尺度を作成した。本研究で用いる尺度は、このMehrabian and Epsteinの尺度項目の文章に手を加え、より日本人にふさわしい内容の尺度として作成されたもの(加藤・高木, 1980)¹⁷⁾である。母親の情動共感性が高いほど子どもへの語りかけが多くなる(西

野, 1988)³⁸⁾、情動共感性の下位概念「感情的暖かさ」の高い母親は、子どものポジティブな共感性を高める(渡辺・瀧口, 1986)⁵⁶⁾、情動共感性の中の「感情的冷淡さ」及び「感情的被影響性」が高い母親ほど、育児困難感が強い傾向にある(小原, 2005)⁴⁰⁾といった結果がこれまでに得られている。以上から、母親の情動共感性の個人差は、子どもへの関わり方に質的な違いを生み出す可能性が考えられ、乳幼児の顔表情からの感情の読み取り方にも影響をもたらすことが予測される。

また、「(4)内的作業モデル(=IWM)」とは、愛着対象との持続的な相互交渉を通して人の内部に形成される心的表象を指し、アタッチメント・パターン(スタイル)、すなわちアタッチメント行動の個人差をもたらす個人特有の心的ルールである(例えば、Bowlby, 1969²⁾, 1973³⁾, 1980⁴⁾; 久保, 2003²¹⁾; 戸田, 1991⁵³⁾)。愛着対象との関係の中で、自己及び他者に関するIWMが構築され、発達に伴って出会う愛着対象との愛着に関連した出来事を要素として、自分自身が愛着対象にどのように受容されているか、あるいはされていないか、どのような反応が期待できるのかといった表象が個人の内部に体制化されていく(訖摩・戸田, 1988⁵¹⁾; 戸田, 1991⁵³⁾)。これを、Bowlby (1980)⁴⁾は「IWM仮説」と呼び、こうした愛着対象についてのモデルと自己についてのモデルは、実際には相補の関係にあるとした。数井・遠藤・田中・坂上・菅沼 (2000)¹⁸⁾は、「いったんこのIWMが固まり始めると、子どもはこれを1つのテンプレートとして様々な対人関係に適用し始める。愛着対象と自身の関係スタイルを基盤に、新たに遭遇する他者のふるまいを予測・解釈し、自分自身の行動のプランニングを行うようになる」(p. 323)と解説している。また、以上に加えて注目すべきは、「IWM仮説」が、「内的作業モデルの世代間伝達」のメカニズムを説明しようとする研究(遠藤, 1993⁷⁾; 数井ほか, 2000¹⁸⁾など)にも用いられている点である。これらの研究は、対人関係のテンプレートである内的作業モデルが、子育てにも適用される可能性を前提としている。以上から、母親自身の内的作業モデルは、子どものシグナルとしての顔表情に対する母親の読み取り方を規定することが予測される。

「(5)情動知能」は、比較的新しい概念であり、定義が研究者によって若干異なる。本研究においては、自己の情動状態、他者の情動状態そして自分を含めた集団の状況のそれぞれを感じ取り適切に対処する能力に注目した、内山・島井・宇津木・大竹 (2001)⁵⁴⁾による「人の気持ちを理解し、自分の感情を制御し、自分の置かれた状況に適正に対応できる能力」という定義を用いた。内山ら (2001)⁵⁴⁾は、対自己、対他者における情動の知

覚、情動の理解と活用、情動のコントロールの3種の機能があるとしている。こうした情動知能の高さと育児ストレスの低さとの間に関連が示されている(大橋・桂・星野, 2015)⁴¹⁾。このことは、情動知能と子育てとの関連性を示唆しており、ストレスによる「傷つきやすさ」や「ストレス反応」と同様に、情動知能もまた、子どもの顔表情からの感情の読み取りの敏感さ、適切さに影響を与えることが予測される。

さらに、自分自身の価値観と現実との間にギャップを感じながら、あるいは、さまざまなストレスに晒されながらも、子どもの感情状態に対応した適切な反応を返そうとする動機付けづけには、「(6)自己統制機能」が関わっていると考えられる。柏木(1986¹⁵⁾, 1988¹⁶⁾)は、児童期における自己制御機能を検討する上で、人間の行動を、その動機と行動の方向という観点から4種類に分類した。それは、「したくないことをする」、「したいことをしない」、「したいことをする」そして「したくないことをしない」という4つであり、動機と行動の方向が異なる場面では自己抑制の側面が機能し、動機と行動の方向が一致する場面では抗議や拒否を含めた自己主張・実現の側面が機能すると説明している(柏木, 1986¹⁵⁾, pp.5-6)。こうした機能の高さは、氾濫する情報や、多様化する価値観にさらされながらも自らを律して子育てを営むために不可欠であると考えられ、子どものシグナルに対する敏感さ、適切さにも影響することが予測される。

II. 方 法

協力者

4~32ヶ月の乳幼児を持つ母親、父親そして祖母150名の協力を得た。そのうち、本研究では、母親のみ(135名)を分析対象とした。実験実施の際に配布した質問紙が回収できたのは114綴りであった(回収率84.4%)。したがって、最終的な分析対象者は20~48歳(M=33.4, SD=5.27)の母親114名であった。

材料

1. 「乳幼児の感情認知検査」(松田, 2006²⁷⁾, 松田・安達, 2012³⁴⁾)

明瞭な顔表情刺激と曖昧な顔表情刺激から構成(全17刺激)されており、誰が見ても同じ感情として捉えられる「明瞭な顔表情刺激」(Appendix 1)への反応から「一般性」を測定し、快感情と不快感情に評価が分かれる「曖昧な顔表情刺激」(Appendix 2)への反応から「個別性」を測定した。

2. 6種の質問紙尺度

以下の質問紙を用いた。



Appendix 1 明瞭な表情刺激の例



Appendix 2 曖昧な表情刺激の例

- 1) 傷つきやすさ尺度(Glover et al., 1994⁴⁰⁾): 「人を信じている」、「新しい所や場面でも気楽にしていられる」、「自分の家族を信頼している」といった18項目からなる。「6. 非常によくあてはまる」~「1. 全くあてはまらない」の6件法で回答を求めた。
- 2) ストレス自己評価尺度(尾関, 1993⁴²⁾): 「体が疲れやすい」、「泣きたい気分だ」、「根気がない」といった35項目からなる。「3. 非常にあてはまる」~「0. あてはまらない」の4件法で回答を求めた。
- 3) 情動共感性尺度(加藤・高木, 1980¹⁷⁾): 「私は映画を見るとき、つい熱中してしまう」、「歌を歌ったり、聞いたりすると、私は楽しくなる」、「わたしは愛の歌や詩に深く感動しやすい」といった33項目からなる。「7. 全くそうだと思う」~「1. 全く違うと思う」の7件法で回答を求めた。
- 4) 内的作業モデル尺度(詫摩・戸田, 1988⁵¹⁾): 現在個人が持っている対人関係の枠組み、自己や他者のあり方に対する信念といった自己及び他者に対する認知の仕方の個人差(例えば、遠藤, 1993⁷⁾; 山岸, 1997⁵⁵⁾), すなわち、対人的認知特性を測定する尺度として用いた。「私は知り合いがしやすい方だ」、「自分を信用できないことがある」、「人に頼るのは好きではない」といった18項目からなる。回答は、「6. 非常によくあてはまる」~「1. 全くあてはまらない」の6件法で求めた。
- 5) 情動知能尺度(内山ほか, 2001⁵⁴⁾): 「感情的になった時でも自分がどう感じているかわかっている」、「自分の能力をわきまえ、イエス、ノーをはっきり言える」、「意味があって始めたことはともかく続けていきたい」といった65項目からなる。「4. 非常によくあてはまる」「3. よくあてはまる」「2. あてはまる」「1. すこしあてはまる」「0. まったくあてはまらない」の5件法で回答を求めた。
- 6) 自己統制機能尺度(松田, 2006²⁹⁾, 2013³³⁾): 「自分の可能性を十分に発揮しようとしている」、「育児中なので、したいことはほとんど我慢している」といった19項目からなる。「5. はい」~「1. いいえ」の5件法で回答を求めた。

手続き

Q市内・X市内の保育園、子育てサークル実施場所、子育て支援事業実施場所、調査協力者の自宅を訪問、または大学構内で協力者を募り、調査内容を説明し、同意を得て実施した。実験は以下の手順で行った。まず、フェイスシートに年齢と職業、子どもの数、長子の年齢、一番下の子どもの年齢を記入してもらった。次に、画像呈示方法について説明した。画像呈示では、まず、予鈴とともにスクリーン及びパソコン画面に番号を映し出し、2秒間呈示した。次に顔写真が一枚、5秒間呈示され、続く5秒間のうちに直前の表情が「うれしい」「かなしいよ」「おこっている」「いやだなあ」「びっくり」「こわいよ」のうちのどの感情を表していると思うか、一つだけ選択して、解答用紙の該当箇所に、「とてもそう思う」場合には◎印を、「そう思う」場合には○印を、「ややそう思う」場合には△を付けてもらった。選択肢としてあげられた6つの言葉は、基本的6感情を表していた。本試行に入る前に、練習として2試行を行い、手順を確認した。一試行12秒で、本試行では全部で17試行を行った。教示を含め、実験に費やした時間は約15分であった。

1. 感情読み取り特性の得点化

一般性得点は、「明瞭な顔表情刺激」に対して、一般的な読みとりをどの程度するのかを示す。したがって、基本6感情のうちから選択されたそれぞれの刺激に対する母親（調査協力者）の回答は、「快感情」（喜び）、「不快感情」（悲しみ、嫌悪、怒り、恐れ）のいずれか、そして「驚き」にコーディングされ、特定されている感情と一致していたならば1点が与えられる。一般性得点の最大は9点である。

個別性得点は、「曖昧な顔表情刺激」から「どのような感情を、どのくらいの強さで読み取る傾向にあるか」を意味する（例えば、「喜び」得点は、「喜び」としての読み取り傾向を表し、「悲しみ」得点は、「悲しみ」としての読み取り傾向を表す）。各顔表情について6感情から選択し、該当欄に記入した感情が△印で記されている場合には1点が、○印で記されている場合には2点が、◎印が記されている場合には3点が与えられる。計8つの顔表情刺激に対する6感情の得点の分布は、曖昧な表情に対する各々の母親の反応傾向（どのような感情として読み取る傾向をどれほど持つのか）を表す。各感情としての読み取り得点は0～最大24点である。一般性得点と個別性得点の記述統計量をTable 1に示した。

Table 1. 感情読み取り特性の記述統計量

	一般性				個別性					
	全体	快	不快	驚き	喜び	悲しみ	嫌悪	怒り	驚き	恐れ
平均値	7.98	5.93	5.91	4.18	2.26	1.28	2.77	1.60	2.40	1.52
標準偏差	0.82	0.37	0.41	1.52	2.33	1.52	1.93	1.39	1.73	1.82

2. 傷つきやすさの記述統計量

6件法で求めた回答を1～6で得点化した。ただし、「社会的気安さ」には正で、「感情の傷つきやすさ」には負で負荷する一項目については、方向を逆にして得点化した。その上で、「社会的気安さ」、「感情の傷つきやすさ」、「家族に対する信頼」の3下位尺度それぞれの得点を算出し、各下位尺度の記述統計量をTable 2に示した。

3. ストレス反応の記述統計量

4件法で求めた回答を0～3で得点化した。逆転項目はないため、全ての項目についてそのままの方向で加算して、「抑うつ」、「不安」、「怒り」、「認知的混乱」、「引きこもり」、「身体的疲労感」、「自律神経系の活動性亢進」の7つの下位尺度ごとの合計得点を算出し、各下位尺度の記述統計量をTable 2に示した。

Table 2. 各尺度の平均値 (M), 標準偏差 (SD), 得点範囲 (range), 信頼性係数 (α), 項目数 (items)

	N	M	SD	range	α	items
傷つきやすさ						
社会的気安さ	114	46.42	6.96	1-6	.83	11
感情の傷つきやすさ	114	13.50	3.60	1-6	.64	5
家族に対する信頼	114	10.46	1.76	1-6	.86	2
ストレス反応						
抑うつ	114	1.56	2.29	0-3	.86	5
不安	114	1.62	2.01	0-3	.71	5
怒り	114	2.65	2.83	0-3	.84	5
認知的混乱	114	1.89	2.48	0-3	.80	5
引きこもり	114	1.18	1.92	0-3	.81	5
身体的疲労感	114	3.83	3.08	0-3	.83	5
自律神経系の活動性亢進	114	0.78	1.41	0-3	.64	5
情動共感性						
感情の暖かさ	114	5.49	0.56	1-7	.64	10
感情の冷淡さ	114	2.60	0.60	1-7	.68	10
感情の被影響性	114	4.36	0.59	1-7	.69	8
内的作業モデル						
安定	114	3.67	0.71	1-6	.78	6
アンビバレント	114	3.13	0.74	1-6	.64	6
回避	114	3.05	0.71	1-6	.72	6
情動知能						
自己対応	114	42.54	15.58	1-5	.91	21
対人対応	114	42.36	13.39	1-5	.90	21
状況対応	114	35.61	15.33	1-5	.94	21
自己統制機能						
自己主張・実現	114	3.55	0.62	1-5	.85	11
自己抑制	114	3.63	0.60	1-5	.72	8

4. 情動共感性の記述統計

7 件法で求めた回答を 1 ～ 7 で得点化した。逆転項目はないため、全ての項目についてそのままの方向で加算して、「感情的暖かさ」、「感情的冷淡さ」、「感情的被影響性」の 3 つの下位尺度ごとの合計得点を算出し、各下位尺度の記述統計量を Table 2 に示した。

5. 内的作業モデルの記述統計量

6 件法で求めた回答を 1 ～ 6 で得点化した。逆転項目はないため、全ての項目についてそのままの方向で加算して、「安定」、「回避」、「アンビバレント」の 3 つの下位尺度ごとの合計得点を算出し、各下位尺度の記述統計量を Table 2 に示した。

6. 情動知能の記述統計量

5 件法で求めた回答を 1 ～ 5 で得点化した。逆転項目はないため、全ての項目についてそのままの方向で加算して、「自己対応」、「対人対応」、「状況対応」の 3 つの下位尺度ごとの合計得点を算出し、各下位尺度の記述統計量を Table 2 に示した。

7. 自己統制機能の記述統計量

5 件法で求めた回答を 1 ～ 5 で得点化した。逆転項目はないため、全ての項目についてそのままの方向で加算して、「自己主張・実現」、「自己抑制」の 2 つの下位尺度ごとの合計得点を算出し、各下位尺度の記述統計量を Table 2 に示した。

Ⅲ. 分析 1：変数間の相関分析

感情読み取り特性と「ストレス反応」のデータの分布が正規分布に近似しなかった（Shapiro-Wilk の正規性の検定）ため、感情読み取り特性と 6 種の母親の個人特性との相関分析、及び「ストレス反応」と他の個人特性との相関分析には、Spearman の順位相関係数の検定を用い、「ストレス反応」以外の母親の個人特性間の相関分析には、Pearson の積率相関係数の検定を用いた。

先に述べた先行研究で得られた結果、及びこれまで松田（2007³⁰⁾、2008³¹⁾、2009a³²⁾、2009b³³⁾、2010³⁴⁾；Matsuda & Adachi, 2011³⁷⁾）で得られた結果から、感情読み取り特性と 6 種の母親の個人特性との間の関連性についての仮説は以下の通りである。

- 1-1. 誰が見ても同じように解釈される乳幼児の「明瞭な顔表情」に対する一般的な反応（一般性）と、情動知能の 3 つの下位概念との間にはそれぞれ正相関が示されるであろう。
- 1-2. 「不快表情からの不快感情の読み取り」と不安定な内的作業モデルによる「回避」的な対人的認知特性との間には負相関が、「アンビバレント」な対人的認知特性との間には正相関が示されるであろう。

快感情の表れとも、不快感情の表れとも解釈される乳幼児の「曖昧な顔表情」に対する反応（個性）においては、以下の 2-1～3 が予測される。

- 2-1. 「曖昧な顔表情」をネガティブな感情として読み取る傾向と、他者に対しても自己に対しても信頼と不信の両面的表象を持つ「アンビバレント」な内的作業モデルとの間には正相関が示されるであろう。
 - 2-2. 「曖昧な顔表情」を唯一の快感情である「喜び」として読み取る傾向と、情動共感性の下位概念「感情的暖かさ」との間には負の相関が、内的作業モデルの「回避」との間には正相関が示されるであろう。
 - 2-3. 「曖昧な顔表情」を「嫌悪」として読み取る傾向は、ストレスによる「傷つきやすさ」や、「ストレス反応」との間には負の相関が示されるであろう。
- また、6 種の母親の個人特性は、それぞれの間に関連性を持ちながら、感情読み取り特性を規定する構造にあることが予測される。そこで、各々の間にある関連性の検証にあたり、上述の各個人特性の定義及び先行研究で得られた結果から、以下の仮説を設定した。
- 3-1. ストレスによる「傷つきやすさ」の下位概念「社会的気安さ」や「家族への信頼」と、「ストレス反応」との間にはそれぞれ負の相関が、傷つきやすさの「感情的傷つきやすさ」と「ストレス反応」との間には正相関が示されるであろう。
 - 3-2. 「情動知能」の 3 つの下位概念はどれも、「内的作業モデル」の「安定」や、「自己統制機能」の「自己実現」と正の相関関係にあることが示されるであろう。
 - 3-3. 「情動共感性」の下位概念「感情的冷淡さ」と、「内的作業モデル」の「回避」との間には正の相関が示されるであろう。

感情読み取り特性と個人特性との関連性

まず、感情読み取り特性と個人特性との間にある関係性を検討したところ、感情読み取りの「一般性」における「快表情からの快感情の読み取り」と「不快表情からの不快感情の読み取り」は、6 種の個人特性との間に相関関係を全く示さなかった。したがって、「『不快表情からの不快感情の読み取り』と不安定な内的作業モデルによる『回避』的な対人的認知特性との間には負相関が、『アンビバレント』な対人的認知特性との間には正相関が示されるであろう」という仮説（1-2）は支持されなかった。

しかし、感情の読み取りの「一般性」全体と、「驚き表情からの驚き感情の読み取り」には、「自己統制機能」と「情動共感性」を除く 4 種の個人特性との間に有意な相関関係が認められた（Table 3）。このことか

Table 3. 感情読み取り特性と個人特性とのSpearmanの相関係数 (N=114)

		感情読み取り特性									
		一般性				個別性					
		全体	快	不快	驚き	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	驚き	恐れ
やさしさ	社会的気安さ	.23*	.06	.11	.19*	-.17†	.08	.08	.01	.14	-.09
	感情の傷つきやすさ	-.25**	-.10	-.02	-.22*	.10	.02	-.05	-.004	-.03	.11
	家族に対する信頼	.21*	-.04	.08	.20*	-.14	.12	.08	.05	.07	.007
ストレス反応	抑うつ	-.25*	.04	.08	-.24**	.08	.0001	-.11	.04	-.02	.06
	不安	-.21*	-.01	.01	-.17†	.05	-.08	.01	-.03	.05	.03
	怒り	-.04	.04	.01	-.06	.03	-.005	-.04	.06	-.06	.11
	認知的混乱	-.22*	-.0008	.05	-.18†	.13	-.02	-.02	-.04	-.07	.07
	引きこもり	-.17†	.09	-.03	-.12	.10	-.10	-.04	-.02	-.09	.20*
	身体的疲労感	-.009	-.06	.07	-.07	.09	-.18*	-.06	-.02	.002	.07
情動共感性	自律神経系の活動性 亢進	.001	-.05	.14	-.02	-.01	-.11	-.01	.10	.06	-.02
	感情的暖かさ	-.009	-.03	.01	-.02	-.09	.07	.04	.09	.13	.08
	感情的冷淡さ	-.17†	-.04	-.01	-.14	-.04	.01	-.08	.05	-.11	.003
モデル作業	感情的被影響性	.04	-.004	.15	-.02	.02	-.001	-.20**	.05	.002	.28**
	安定	.22*	-.05	.07	.23*	-.21*	.04	.04	.004	.16†	.03
	回避	-.18*	.03	-.02	-.20*	.14	-.10	-.13	-.07	-.14	.08
情動知能	アンビバレント	-.17†	-.07	-.04	-.10	-.08	.07	.02	.17†	-.08	.25*
	自己対応	.16†	-.02	.15	.11	-.02	.008	-.06	-.01	-.08	.001
	対人対応	.11	.0007	-.08	.08	-.13	.05	.07	.07	.16†	-.08
自己統制機能	状況対応	.19*	-.02	.03	.19*	-.10	.11	.05	.03	.16†	-.11
	自己主張・実現	-.07	.04	.05	-.08	-.02	.09	-.17†	.005	-.03	-.06
	自己抑制	-.06	-.10	-.08	-.04	-.004	-.25**	-.07	-.002	.04	.16†

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

Table 4. 母親の個人特性としての変数間の単純相関 (N=114)

		傷つきやすさ			情動共感性			内的作業モデル			情動知能			自己統制機能	
		社会的 気安さ	感情の 傷つき やすさ	家族に 対する 信頼	感情的 暖かさ	感情的 冷淡さ	感情的 被影響 性	安定	回避	アンビ バレン ト	自己 対応	対人 対応	状況 対応	自己主 張・実 現	自己 抑制
情動共感性	感情的暖かさ	.10	.005	.07											
	感情的冷淡さ	-.04	.18	-.002											
	感情的被影響性	-.17	.16	-.05											
内的作業モデル	安定	.69***	-.55***	.21*	.03	-.02	-.22*								
	回避	-.28**	.33***	.001	.07	.36***	-.02								
	アンビバレント	-.38***	.61***	-.12	.08	.06	.32***								
情動知能	自己対応	.43***	-.27**	.26**	.04	.03	-.26**	.45***	.004	-.21*					
	対人対応	.49***	-.34***	.22*	.33***	-.20*	-.09	.52***	-.30**	-.01					
	状況対応	.59***	-.43***	.25**	.05	-.01	.32***	.61***	-.17	-.30**					
自己統制機能	自己主張・実現	.51***	-.36***	.24**	.12	-.04	-.12	.47***	-.03	-.34***	.46***	.32***	.56***		
	自己抑制	-.16	.19*	-.10	-.04	.03	.009	-.17	.06	.29**	.11	.08	.05		
ストレス反応	抑うつ	-.18	.39***	-.28**	-.05	.12	.11	-.19*	.04	.34***	-.02	-.07	-.17	-.15	.25**
	不安	-.28**	.38***	-.28**	-.008	.02	.12	-.30**	.18	.38***	.18	-.13	-.29**	-.31**	.19*
	怒り	-.32***	.45***	-.30**	.06	.07	.19*	-.24*	.13	.26**	-.13	-.06	-.24*	-.29**	.27**
	認知的混乱	-.34***	.42***	-.29**	.05	.14	.20*	-.25**	.17	.23*	-.40***	-.32***	-.43***	-.36***	.02
	引きこもり	-.38***	.56***	-.21*	-.04	.18	.09	-.36***	.28**	.33***	-.23*	-.28**	-.34***	-.36***	.13
	身体的疲労感	-.23*	.31***	-.26**	-.05	.06	.06	-.20*	.06	.23*	-.12	-.08	-.22*	-.27**	.23*
	自律神経系の活動性亢進	-.12	.16	-.26**	.09	-.05	.007	-.15	-.0004	.18	-.04	-.11	-.14	-.15	.20*

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注：ストレス反応と他の変数間の相関はSpearmanの相関係数を求め、それ以外の変数間の相関はPearsonの相関係数を求めた。

ら、「感情読み取りの『一般性』と、情動知能の3つの下位概念との間にはそれぞれ正相関が示されるであろう」という仮説（1-1）は、ほぼ支持された。

一方、曖昧な顔表情から特定の感情を読み取る傾向（個別性）との間には、6種の個人特性の全てが有意な相関関係を示した（Table 3）。これにより、「曖昧な顔表情をネガティブな感情として読み取る傾向と、アンビバレントな内的作業モデルとの間には正の相関が示されるであろう」という仮説（2-1）と、「曖昧な顔表情を『喜び』として読み取る傾向と、情動共感性の下位概念『感情の暖かさ』との間には負の相関が、内的作業モデルの『回避』との間には正相関が示されるであろう」という仮説（2-2）は支持された。しかし、「曖昧な顔表情を『嫌悪』として読み取る傾向は、『傷つきやすさ』や、『ストレス反応』との間に負の相関を示すであろう」という仮説（2-3）は支持されなかった。

個人特性間の関連性

次に、感情読み取り特性を規定することが想定される6種の個人特性間の関連性を相関分析によって検討した。その結果、情動共感性と傷つきやすさの間、及び情動共感性と自己統制機能との間には、各下位概念間に有意な関連は認められなかったが、それ以外の全ての個人特性間には、有意な相関関係が示された（Table 4）。これにより、「傷つきやすさの下位概念『社会的気安さ』や『家族への信頼』と、ストレス反応との間にはそれぞれ負の相関が、『感情の傷つきやすさ』とストレス反応との間には正相関が示されるであろう」という仮説（3-1）、「情動知能の3つの下位概念はどれも、内的作業モデルの『安定』と正の相関関係を示すであろう」という仮説（3-2）、及び「情動共感性の下位概念『感情の冷淡さ』と、内的作業モデルの『回避』との間には正の相関が示されるであろう」という仮説（3-3）が全て支持された。

IV. 分析2：パス解析

統計処理には、SPSS Statistics 19及びAmos 19を使用した。

仮説モデルの設定

分析1の相関分析で得られた感情読み取り特性と個人特性との有意な関係性、及び個人特性間の有意な相関関係に基づき、一般性モデル、驚き表情-感情モデル及び、喜びモデル、悲しみモデル、嫌悪モデル、怒りモデル、恐れモデル、驚きモデルの8種の仮説モデルを設定した（Figure 1）。また、全変数における共分散行列を求め、Table 5に示した。

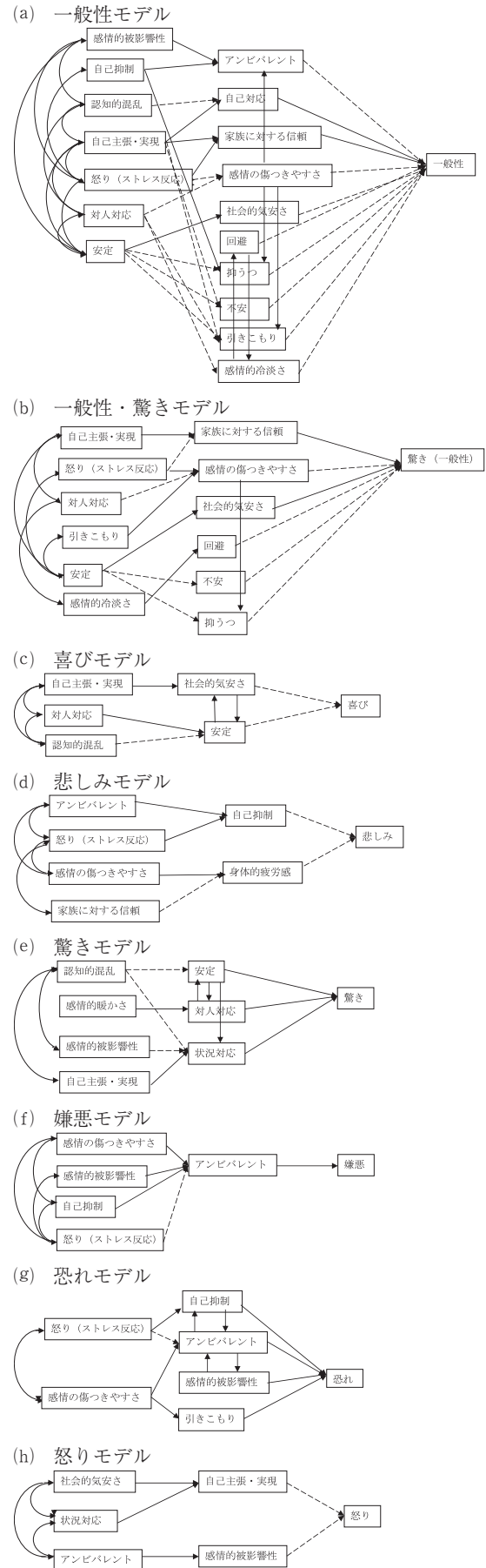


Figure 1. 仮説モデルの設定

注：実線は正の関係，破線は負の関係を表す。

Table 5. パス解析に用いた変数間の共分散行列

	個 別 性						一 般 性				社会的 気安さ	感情の傷つき やすさ	信頼 家族に対する	感情の暖かさ	感情の冷淡さ	感情の被影響性	自己主張 実現	自己抑制	安定	アンビバレン ト	回避	自己対応	対人対応	状況対応
	喜	悲	怒	嫌	驚	恐	全体	快	不快	驚き														
社会的気安さ	-3.06	1.34	0.92	0.39	1.85	-1.30	1.35	0.15	0.41	2.03														
感情の傷つきやすさ	-0.15	-0.12	-0.29	0.13	-0.41	1.06	-0.70	-0.14	-0.03	-1.14														
家族に対する信頼	-0.40	0.25	0.13	0.20	0.32	-0.15	0.42	-0.02	0.16	0.07														
暖かさ	-1.83	0.64	0.92	1.34	1.69	1.11	0.02	-0.10	0.01	0.29	3.98	0.11	0.66											
冷淡さ	-0.17	0.35	-0.83	0.31	-1.84	0.75	-0.78	-0.10	-0.05	-1.36	-1.77	3.88	-0.02											
被影響性	-0.32	0.14	-1.09	0.50	-0.04	2.25	0.10	0.01	0.25	0.03	-5.50	2.71	-0.42											
自己主張	1.41	1.01	-1.35	-0.72	0.84	-1.30	-0.63	0.05	0.11	-1.53	24.05	-8.70	2.89	4.55	-1.66	-3.78								
自己抑制	1.64	-1.96	-0.66	-0.38	-0.42	1.64	-0.36	-0.21	-0.19	-0.60	-5.32	3.25	-0.79	-0.94	0.93	0.20								
安定	-1.44	0.19	0.80	-0.26	1.16	-0.27	0.75	-0.07	0.12	1.36	20.29	-8.40	1.52	0.68	-0.43	-4.47	13.49	-3.47						
アンビ	-2.22	0.52	0.13	1.24	-0.43	2.17	-0.49	-0.08	-0.05	-0.79	-11.60	9.64	-0.93	1.88	1.58	6.66	-10.30	6.13						
回避	2.23	-0.81	-0.88	-0.31	-1.33	1.16	-0.67	0.05	-0.03	-1.38	-8.35	5.07	0.01	-1.65	9.31	-0.46	-0.79	1.23						
自己対応	0.57	-0.15	-1.38	-0.02	1.90	-0.93	1.74	-0.19	0.85	1.90	46.24	-15.00	7.12	3.43	2.38	-19.10	48.96	7.90	29.50	-14.30	0.29			
対人対応	-4.34	0.69	1.44	1.10	4.69	-2.36	1.16	0.02	-0.44	2.36	45.45	-16.00	5.01	24.88	-16.00	-5.87	29.41	4.93	29.50	-7.11	-17.00			
状況対応	-2.26	1.35	0.34	0.79	5.94	-0.93	2.43	-0.36	0.19	4.47	61.97	-23.00	6.58	4.15	-0.92	-22.80	58.46	-3.73	39.30	-20.00	-11.00			
抑うつ	-0.03	0.11	-0.23	0.18	0.04	0.37	-0.40	0.004	0.05	-0.89	-3.53	3.45	-1.20	0.62	1.25	2.32	-2.54	2.80	-2.30	3.74	0.79	-2.17	-2.24	-7.91
不安	0.02	-0.07	0.15	0.02	0.12	0.20	-0.31	-0.04	-0.02	-0.55	-4.12	2.57	-0.94	0.43	0.50	1.70	-4.08	1.78	-2.40	3.06	1.15	-5.64	-3.36	-7.98
怒り	-0.21	0.01	-0.34	0.41	-0.15	0.63	-0.09	0.05	0.02	-0.25	-5.98	4.94	-1.24	1.03	2.07	2.95	-5.08	3.79	-3.00	3.89	2.00	-4.39	-2.21	-10.04
認知	0.14	0.29	-0.35	0.07	-0.35	0.27	-0.30	-0.01	0.04	-0.58	-4.53	3.14	-0.75	-0.24	3.44	2.34	-4.01	0.28	-2.00	2.21	1.66	-12.25	-9.02	-12.96
引きこもり	0.03	-0.32	-0.25	0.07	-0.16	0.59	-0.28	0.06	0.03	-0.64	-4.82	3.95	-0.63	0.08	1.39	1.17	-3.54	1.94	-3.00	3.04	2.61	-4.27	-6.46	-9.92
身体的疲労感	0.20	-0.87	-0.33	-0.24	-0.13	0.26	-0.20	-0.05	0.07	-0.53	-5.24	3.86	-1.46	-0.84	2.04	0.74	-6.01	3.05	-3.10	3.54	1.47	-5.15	-4.47	-9.13
自律神経系の活動性 亢進	-0.26	-0.15	-0.11	0.20	0.05	0.03	0.02	0.002	0.07	-0.07	-1.56	1.14	-0.64	0.64	0.96	-0.08	-1.87	1.53	-1.00	1.17	0.53	-2.26	-3.18	-2.88

モデルの検証結果

ブートストラップ法によるパス解析を行った。モデルを評価する適合度指標として、小塩 (2008)¹⁹⁾におけるGFI(Goodness of Fit Index), AGFI(Adjusted Goodness of Fit Index), RMSEA(Root Mean Square Error of Approximation), AIC (Akaike Information Criterion)を参照した。

その結果、「嫌悪モデル」では、「嫌悪」への直接効果が認められなかった ($\beta = .14$, $p = .126$)。他のモデルに関しては、適合度を示す指標のうち、RMSEAはどのモデルも低かった (.000～.248)。しかし、一般性モデル (GFI=.565, AGFI=.400, CFI=.329) と驚き表情-驚き感情モデル (GFI=.605, AGFI=.401, CFI=.313) においては、GFIとAGFI, CFIも低く十分に適合しなかった。一方、個別性における喜びモデル (GFI=.887, AGFI=.622), 悲しみモデル (GFI=.926, AGFI=.811), 怒りモデル (GFI=.953, AGFI=.858), 恐れモデル (GFI=.921, AGFI=.756), 驚きモデル (GFI=.841, AGFI=.100) であり、GFIはどのモデルも高かったが、いずれのモデルもAGFIとの間に差が認められた。そこで、完全媒介モデルを仮定して、一般性モデル、驚き表情-驚きモデル、喜びモデル、悲しみモデル、怒りモデル、恐れモデル、驚きモデルの7種のモデルにおける有意ではないパスを逐次的に削除して、それぞれのモデルを再構築した。その結果、7種のモデルの全てにおいて、GFI, AGFI, CFIは高く、RMSEAとAICは低く、全てのパスが統計的に有意となり (Figure

Table 6. モデル適合度

		GFI	AGFI	RMSEA	CFI	AIC
一般性	一般性モデル	.949	.848	.127	.870	47.8
	驚き感情モデル	.815	.650	.239	.372	175.3
個別性	喜びモデル	.975	.873	.134	.965	22.1
	悲しみモデル	.985	.923	.084	.952	19.6
	怒りモデル	.953	.858	.112	.924	60.0
	恐れモデル	.987	.936	.065	.987	19.0
	驚きモデル	.987	.958	.000	1.000	16.8

2), いずれも適合度の高いモデルとなった (Table 6)。

各モデルにおける「感情の読み取り」への影響性

パス解析 (ブートストラップ法) を行った。その結果、まず、感情の読み取りの「一般性」に直接効果をもたらしているのは「家族に対する信頼」と「感情の傷つきやすさ」であり、「家族に対する信頼」は、誰もが同じ感情を読み取る乳幼児の明瞭な顔表情からの感情の読み取りの「一般性」を強め、「感情の傷つきやすさ」は弱めることが示された (Figure 2)。家族に対する信頼が厚い母親ほど、また環境からの刺激に対する弾力性が高い母親ほど乳幼児の明瞭な顔表情がから一般的な読み取りをすることが示唆された。

「一般性」を示す指標のうちの「驚き表情からの驚き感情の読み取り」への直接効果は、「家族に対する信頼」と不安定な内的作業モデルによる「回避」的な対人的認知傾向からと、「抑うつ」としてのストレス反応から与えられていることが示された (Figure 2)。「家族に

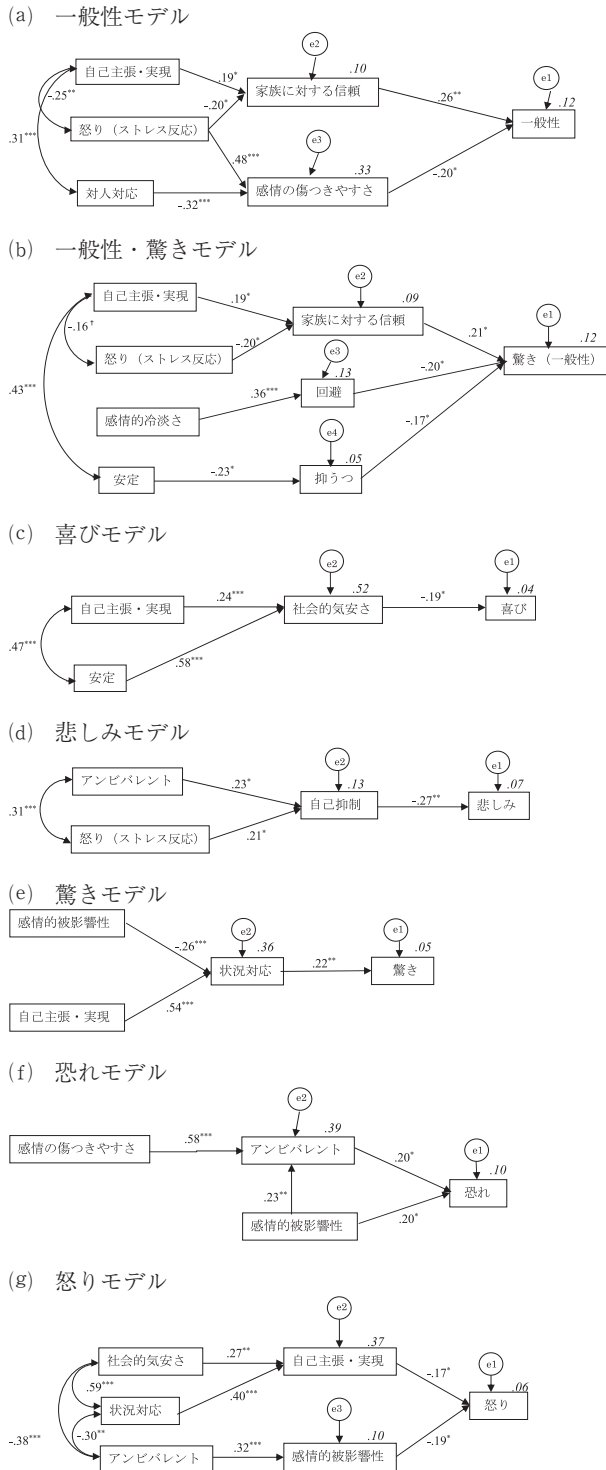


Figure 2. パス解析の結果

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

注：係数は全て標準化係数。

対する信頼」は「驚き表情からの驚き感情の読み取り」を高め、「回避」と「抑うつ」は低めることが示され、家族に対する信頼感が強く、他者との関係を回避する対人的認知傾向を持たない、抑うつ状態にない母親ほど、乳幼児の明らかな「驚き表情」を「驚き感情」の表れとして評価できることが示唆された。

また、快と不快が曖昧な乳幼児の顔表情からの感情の読み取りの個人差である「個性」における「喜び」としての読み取りに直接効果を与えるのは、「社会的気安さ」であった。「社会的気安さ」から「喜び」としての読み取りへの負の影響が認められ、その背後で自己主張・実現と「安定」した対人的認知特性が外性変数として間接的に正の影響を与えていることも示された (Figure 2)。この結果は、他者との付き合いにおいても、新しい場所や場面に対しても、人ごみの中でも気楽にしていられるといった、環境に対する適応力の高い母親ほど、唯一の快感情「喜び」として読み取らないことを示しており、そうではない母親ほど、子どもの曖昧な顔表情から「喜び」を読み取ることを意味している。このことは、育児不安が高いほど、虐待リスクが高いほど「快感情」として評価する傾向にある (小原, 2005⁴¹⁾; Butterfield, 1993⁵⁾) という結果との類似性を示唆するものである。

「悲しみ」としての読み取りに直接効果を与えるのは「自己抑制」であり、「自己抑制」の機能は「悲しみ」としての評価を抑える効果を持つことが示された (Figure 2)。「したいことをしない、したくないことをする」といった、欲求や意思と反する行動を自らに課す傾向にあるほど、本来は「悲しみ」という感情として評価したいけれども、そうはしないと抑制を行うことのあらわれとも考えられる。「悲しみ」という感情として読み取ることにより自分自身の感情状態が不安定になることを避けようとする無意識下での防衛、あるいは意識レベルでの情報処理のあらわれであるのかも知れない。

「怒り」としての読み取りへの直接効果は「自己主張・実現」と「感情の被影響性」であり、どちらも「怒り」としての評価を弱めることが示された (Figure 2)。この結果は、どちらの特性を持つ母親も「怒り」として読み取らないことを示しているけれども、それぞれには以下に述べるような異なる背景が考えられる。「したいことをし、したくないことをしない」傾向にあり、自己主張・実現を果たしている母親は、日頃から「怒り」感情を抱く機会が乏しいため、他者の曖昧な顔表情から「怒り」感情を選択的に読み取る傾向 (emotion-specific perceptual blindness/readiness) (Malatesta & Wilson, 1988²⁵⁾) にはない。まして、幼い子どもの曖昧な顔表情から「怒り」感情を読み取る傾向はないことのあらわれである可能性が考えられる。一方、他者の感情状態に影響を受ける傾向にある母親は、「怒り」感情を読み取ることにより自分の感情が巻き込まれることを防衛的に避けようとすることの示唆である可能性が考えられる。

「恐れ」としての読み取りに直接効果をもたらすのは「アンビバレント」と「感情的被影響性」であり、どちらも正の影響を与えることが示された。また、「感情的被影響性」は「アンビバレント」を媒介して間接効果をもたらすことが示された（Figure 2）。他者の感情状態に影響されやすい性質や、他者に対しても自分に対しても信頼と不信の両価的表象を抱く対人的認知傾向は、乳幼児の曖昧な顔表情から「恐怖」感情を読み取らせることが示され、母親の情緒的な不安定さが子どもの感情状態に投影される可能性が示唆された。

「驚き」としての読み取りに直接効果を与えるのは「状況対応」であった（Figure 2）。自分を含む集団が置かれている状況を捉える能力の高さ、場の雰囲気を読む力の高さが、快の感情でも不快感情でもあると考えられ、またそのどちらでもない独立した感情状態とも捉え得る「驚き」感情として読み取らせることを示す結果である（Figure 2）。快感情とも不快感情とも言える感情であるということは、その感情として読み取ったことによる心理的な負担感も軽い可能性はないだろうか。また、自分の内面にある情動に触れるほど、性格特性や対人的認知特性といった個人特性に関わるほどには深層まで「情報」が取り込まれなかったこと、あるいはその処理自体がごく表層で完結したことのあらわれである可能性も考えられる。すなわち、子どもの感情状態がどういったものであるのかの判断に迷うような課題遂行場面においても、そつのない回答を選択した結果としての、「驚き」感情としての読み取り反応である可能性が考えられる。

V. 総合的考察

分析Ⅰでは、先行研究で得られている結果及び筆者がこれまでに得た結果から、感情読み取り特性と6種の個人特性との間の関連性について仮説を立て、相関分析を行った。その結果、誰が見ても同じ感情を読み取る「明瞭な顔表情」から一般的な読み取りをする傾向（一般性）と「明瞭な驚き表情からの驚き感情の読み取り」には、「自己統制機能」と「情動共感性」を除く4種の個人特性との間に有意な相関が認められた。しかし、「明瞭な快表情からの快感情の読み取り」及び、「明瞭な不快表情からの不快感情の読み取り」と母親の個人特性との間には、関連が全く示されなかった。一方、快・不快が「曖昧な顔表情」から特定の感情を読み取る傾向（個別性）との間には、6種の個人特性の全てが相関関係を示した。また、個人特性間では、情動共感性と、傷つきやすさ及び自己統制機能以外の下位概念の間には、相関関係が示された。

分析Ⅱでは、分析Ⅰで示された相関関係に基づき8種の仮説モデルを設定し、パス解析により検証した。その結果、感情の読み取りの「一般性」に直接効果をもたらすのは、「家族に対する信頼」と「感情の傷つきやすさ」であること、「驚き表情からの驚き感情の読み取り」への直接効果は、「家族に対する信頼」と、不安定な内的作業モデルによる「回避」的な対人的認知傾向、ストレス反応のうちの「抑うつ」であることが示された。また、一方の「曖昧な顔表情」からの感情の読み取りにおける結果は以下の通りであった。「喜び」の読み取りに直接効果は、「社会的気安さ」であり、「悲しみ」としての読み取りには、「自己抑制」が「悲しみ」としての評価を抑える効果を直接的に持つことが示された。さらに、「怒り」としての読み取りへの直接効果は、「自己主張・実現」と「感情の被影響性」であり、「恐れ」としての読み取りに直接効果をもたらすのは、「アンビバレント」と「感情的被影響性」であり、「驚き」としての読み取りに直接効果を与えるのは、「状況対応」であることが示された。以上の結果を通して、母親による乳幼児の顔表情からの感情の読み取り方は、母親の個人特性によっても、直接的に、また間接的に規定されることが明らかとなった。

子育てをめぐる社会的対人的環境、条件の違いが、養育行動の個人差に関与していることは予測されるところであり、その手前にある、子どもが発信する非言語的なシグナルへの敏感さ、解釈の仕方の個人差にも関与しているであろうこともまた予測される。しかし、よく似た環境や条件の中にあっても、子どもが発するシグナルへの反応には個人差が生じる。では、そこに差異を生み出すものは何か。その主要な要因の一つが「母親自身が持つ特性」であるという観点から本研究は出発し、母親による乳幼児の顔表情からの感情の読み取りと、育児に関わる母親の個人特性との関連性を検討した。

今後は、母親の感情読み取り特性と、育児との直接的な関係は想定されない、例えば、「攻撃性」や「内向性・外向性」といったパーソナリティにおける個人差、あるいは、「防衛機制」の用い方や、物事に対する「価値観」の違いなどとの関連性も明らかにしていく必要があると考えられる。その上で、顔表情からの感情の読み取り方の個人差が、どのような臨床傾向のスクリーニングになりうるのかについて探求していく必要があろう。

文献

- ¹⁾ Baldwin, M. W., & Kay, A. C. (2003). Adult attachment and the inhibition of rejection. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 22, 275-293.
- ²⁾ Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss: Vol.1, At-*

- tachment*. New York: Basic Books. (Revised ed., 1982).
- ³⁾ Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss : Vol.2, Separation : anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- ⁴⁾ Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss : Vol.3, Loss*. New York: Basic Books. Butterfield, P. M. (1993). Responses to IFEEL pictures in mothers at risk for child maltreatment. In R. N. Emde, J. D. Osofsky, & P. M. Butterfield (Eds.), *The IFEEL Pictures : A new instrument for interpreting emotions* (pp.161-173). Madison, CT: International Universities Press.
- ⁵⁾ Butterfield, P. M. (1993). Responses to IFEEL pictures in mothers at risk for child maltreatment. In R. N. Emde, J. D. Osofsky, & P. M. Butterfield (Eds.), *The IFEEL Pictures : A new instrument for interpreting emotions* (pp.161-173). Madison, CT: International Universities Press.
- ⁶⁾ Emde, R. N., & Sorce, J. F. (1982). The meaning of infant emotional expressions: regularities in caregiving responses in normal and down's syndrome infants. *Child psychology and Psychiatry*, 23 (2), 145-158. (エムデ, R. N., ソース, J. F. 小此木啓吾 (監訳) (1988). 乳幼児からの報酬: 情緒応答性と母親参照機能. *乳幼児精神医学*. (pp. 25-48). 東京: 岩崎学術出版社.)
- ⁷⁾ 遠藤利彦 (1993). 内的作業モデルと愛着の世代間伝達. *東京大学教育学部紀要*, 32, 203-220.
- ⁸⁾ Forgas, J.P. (Ed.) (2000). *Feeling and thinking : The role of affect in social cognition*: Cambridge University Press.
- ⁹⁾ Fraley, R. C., et al. (2006). Adult attachment and the perception of emotional expressions: Probing the hyperactive strategies underlying anxious attachment, *Journal of Personality*, 74, 1163-1190
- ¹⁰⁾ Glover, H., et al. (1994). Vulnerability scale: A preliminary report of psychometric properties. *Psychological Reports*, 75, 1651-1668.
- ¹¹⁾ 濱田康子 (1990). 乳幼児の表情写真 (IFEEL Picture) に対する精神分裂女性患者の情緒反応に関する研究. *慶応医学*, 67(6), 1051-1065.
- ¹²⁾ 池田由子 (1987). *児童虐待*. 東京: 中央公論社.
- ¹³⁾ Izard, C. E. (1991). *The Psychology of emotions*. New York: Plenum Press.
- ¹⁴⁾ 金政祐司 (2005). 自己と他者への信念や期待が表情の感情認知に及ぼす影響: 成人の愛着的視点から *心理学研究*, 76, 359-367.
- ¹⁵⁾ 柏木恵子 (1986). 自己制御 (self-regulation) の発達. *心理学評論*, 29(1), 3-24.
- ¹⁶⁾ 柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達: 行動の自己制御機能を中心に. 東京: 東京大学出版会.
- ¹⁷⁾ 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情動の共感性の特質. *筑波大学心理学研究*, 2, 33-42.
- ¹⁸⁾ 数井みゆき 他 (2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達. *教育心理学研究*, 48, 323-332.
- ¹⁹⁾ 小塩真司. (2008). 共分散構造分析ははじめの一步: 図の意味から学ぶパス解析. 東京: 東京図書.
- ²⁰⁾ 向後礼子・越川房子 (1996). 感情の認知に影響を及ぼす要因について. *早稲田心理学年報*, 29(1), 27-32.
- ²¹⁾ 久保 恵 (2003). *情動的対人情報処理と内的作業モデル*. 東京: 風間書房.
- ²²⁾ Lazarus, R. S. (1988). *Measuring stress to predict health outcome*. (1988年10月29日に野口英世記念館 (東京) で開催された講演「ストレス測定と健康への影響の予測」の記録) (ラザルス, R. S. 林峻一郎, (編・訳) (1990). *ストレスとコーピング: ラザルス理論への招待*. 東京: 星和書店.)
- ²³⁾ Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer. (ラザルス, R. S., & フォークマン, S. 本明寛 (監訳) (1991). *ストレスの心理学: 認知的評価と対処の研究*. 東京: 実務教育出版.)
- ²⁴⁾ Magai, C., & McFadden, S. (1995). *The role of emotion in social and personality development: History, theory, and research*. New York: Plenum.
- ²⁵⁾ Malatesta, C. Z., & Wilson, A. (1988). Emotion cognition interaction in personality development: A discrete emotions, functionalist analysis. *British Journal of Social Psychology*, 27, 91-112.
- ²⁶⁾ 正高信男 (1999). *赤ちゃんの認識世界*. 京都: ミネルヴァ書房.
- ²⁷⁾ 松田久美 (2006). 養育者の sensitivity の測定法の開発及びそれに対する他の個人特性の影響. *北海道教育大学大学院教育学研究科2005年度修士論文*.
- ²⁸⁾ 松田久美 (2007). 養育者の表情認知構造の検討1: 「表情刺激」開発の試み. *電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会研究報告書*, 107 (117), 17-22.
- ²⁹⁾ 松田久美 (2008). 「養育者の sensitivity」の構造についての探索的研究3: 情動共感性との関連性の検討から. *日本保育学会第61回大会発表論文集*, 598.
- ³⁰⁾ 松田久美 (2009a). 「養育者の sensitivity」の構造についての探索的研究4: IWMとの関連性の検討から. *日本発達心理学会第20回大会論文集*, 632.

- 31) 松田久美 (2009b). 「養育者の sensitivity」の構造についての探索的研究 5 : 自己統制機能の関連性の検討から. 日本教育心理学会第51回大会発表論文集, 197.
- 32) 松田久美 (2010). 母親の感情読み取り特性と他の個人特性との関連性の検討: 乳児の顔表情に対する反応から. 北海道大学大学院文学研究科心理システム科学平成22年度研究論文 I.
- 33) 松田久美 (2013). 母親の感情読み取り特性における個人差を規定する要因の検討: 乳児の顔表情に対する反応とパーソナリティとの関連性から. 北海道大学大学院文学研究科心理システム科学平成25年度研究論文 II
- 34) 松田久美・安達真由美 (2012). 乳幼児の顔表情に対する養育者の反応: 乳幼児の顔表情刺激の選定の過程から. 日本顔学会第17回大会学会誌, 12, 143.
- 35) Matsuda, K. and Adachi, M. (2011, March). *The relations between mothers' interpretations of toddlers' facial expressions and their personality constructs*. Poster session presented at 2011 Biennial Meeting for Research in Child Development. Montreal, Quebec, Canada. Biennial Meeting.
- 36) Mehrabian, A., & Epstein, N. (1972). A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525-543.
- 37) Mikulincer, M. & Orbach, I. (1995). Attachment styles and repressive defensiveness: The accessibility and architecture of affective memories. *Journal of personality and Social Psychology*, 68, 917-925.
- 38) 西野美佐子 (1988). Maternal Speechに関する研究 (2): 情動共感性と子どもとの接触経験とに関連して. 東北福祉大学紀要, 14, 211-223.
- 39) 野澤みつえ (1989). 親業ストレスに関する基礎的研究. 教育学科研究年報, 15, 35-56.
- 40) 小原倫子 (2005). 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連. 発達心理学研究, 16, 92-102.
- 41) 大橋純子・桂 敏樹・星野明子 (2015). 乳幼児を養育する母親における育児ストレスと情動知能要因との関連. 乳児保健研究, 74(6), 878-883.
- 42) 尾関友佳子 (1993). ストレス自己評価尺度の改訂. 久留米大学大学院紀要比較文化研究, 1, 95-114.
- 43) Pollak, S.D., et al. (2000). Recognizing emotion in faces: Developmental effects of child abuse and neglect. *Developmental psychology*, 36 (5), 679-688.
- 44) Schaffer, R. (1977). *Mothering*. Cambridge: Open Books Publishing Ltd, Harvard University Press (シャファー, R. 矢野喜夫・矢野のり子 (訳) (1979). 母性のはたらき. 東京: サイエンス社.)
- 45) Shaver, P. R., & Mikulincer, M. (2007). Adult attachment strategies and the regulation of emotion. In J. J. Gross (Ed.), *Handbook of emotion regulation*. New York: Guilford Press, pp. 446-465.
- 46) 島 義弘 (2010). 愛着の内的作業モデルが対人情報処理に及ぼす影響: 語彙判断課題による検討. パーソナリティ研究, 18, 75-84.
- 47) 島 義弘 他 (2012). 内的作業モデルが表情刺激の情動認知に与える影響. 心理学研究, 83, 75-81.
- 48) Starn, D.N. (1977). *The first relationship: Infant and Mother*. London: Open Books. (スターン, D. N 岡村桂子 (訳) (1979). 母子関係の出発. 東京: サイエンス社.)
- 49) Stotland, E. (1969). Exploratory investigations of empathy. In Berkowitz, L. (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (pp.271-314). New York: Academic Press.
- 50) Strathearn, L., et al. (2009). Adult attachment predicts maternal brain and oxytocin response to infant cues. *Neuropsychopharmacology*, 34(13), 2655-2666.
- 51) 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度: 成人版愛着スタイル尺度作成の試み. 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 52) Tomkins, S.A. (1995). *Exploring affect: The selected Writings of Silvan S. Tomkins*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 53) 戸田弘二 (1991). Internal Working Models研究の展望. 北海道大学教育学部紀要, 55, 133-144.
- 54) 内山喜久雄・鳥井哲志・宇津木成介・大竹恵子 (2001) 情動知能尺度 (EQS: エクス) の開発と因子的妥当性, 信頼性の検討. 産業ストレス研究, 8 (3), 153-161.
- 55) 山岸明子 (1997). 青年後期から成人期初期の内的作業モデル: 縦断研究. 発達心理学研究, 8 (3), 206-217.
- 56) 渡辺弥生・瀧口ちひろ (1986). 幼児の共感と母親の共感との関係. 教育心理学研究, 34(4), 324-331.

An investigation of mothers' individual personalities which determining mothers' interpretations of toddlers' facial expressions

Abstract

The purpose of this study was to investigate the mothers' individual personalities that determine their interpretations of toddlers' facial expressions through the experiments using toddlers' pictures and the questionnaire surveys based on the same sample pictures. The participants were 114 mothers with 4- to 32 -month-old infants.

The results of correlation analysis showed that there is no correlation between six individual personalities and such investigative items as "to read pleasure from pleasant facial expressions" and "to read displeasure from unpleasant facial expressions." In the interpretations of toddlers' ambiguous facial expressions, however, significant correlations with all the six individual personalities were shown. Furthermore, significant correlations among the individual personalities were recognized except in "emotional empathy" and "vulnerability", and "emotional empathy" and "self-control".

Pass analysis was also made using seven hypothetical models. The results showed these mothers' individual personalities that could affect the mothers' interpretations both directly and indirectly.

Key word : interpretation, individual personality, clear facial expressions, ambiguous facial expressions